

---

# 本の虫 ~ 12月の図書館 ~

\*姫林檎\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本の中々12月の図書館

### 【Nコード】

N5264D

### 【作者名】

\* 姫林檎\*

### 【あらすじ】

野球部恒例クリスマス会。好きな人と過ごすクリスマス。2人きりじゃないし、両思いじゃないけど、嬉しい・・・

街中がキラキラで、にぎやかで、華やかになる12月。

いや、実際は11月の半ばにはもうこの状態になるんだけど。

毎年、街がクリスマス一色に染まると凄く嬉しくなった。

今年はその中に、近藤君がいる。

野球部で配られたプリントを見て、思わず1人でにやけてしまう。

今年のクリスマスは野球部恒例のクリスマス会がある。

当然近藤君も来るから、今年のクリスマスは近藤君と過ごせる。

2人きりじゃないし、両思いじゃない。

だけど、一緒に過ごせるクリスマス。

「マネージャー！クリスマスに浮かれるのはいいがボール磨けよ！」

「あ、はい！すみません！」

顧問の先生に言われ、慌ててプリントから顔を上げた。

そんな私を見て練習中のみんなが笑う。

ため息をついてボールを磨くと近藤君が私の頭に手を置いた。

「クリスマス好きなんだ？」

「うわー!!」

驚いてボールを落とすと近藤君はきよとんとした。

「そ、そう！好きなんです！」

「ごめんごめん。驚かせた？」

そう言って近藤君は笑う。

胸が苦しくなる。

毎日毎日近藤君が好きで、毎日毎日近藤君が私を好きになることを願う。

そんな毎日が嬉しくて、幸せで、楽しくて、苦しい……。

クリスマス会当日、部室で私はオレンジジュースを飲んでいた。

「マネージャーは飲まないの？」

顔を真っ赤にして酔った先輩が私にチューハイの缶を渡そうとする。

「い、いえ、私は……」

ちらりと近藤君のほづを見ると目が合う。

「加藤！マナージャーには飲ませるなよ！」

「なんだよお、いい人ぶって！加藤も飲みやがれ！」

「俺はアルコール弱い。それに、マナージャー送るのは俺だから俺が酔うわけにはいかないだろ？」

そう言っただけで近藤君が笑うと先輩はため息をついてその場に倒れた。

ああ、つぶれちゃった。

同じように床に寝転ぶ人が何人かいた。

部室の中はお酒のおいが充満していて、正直気分が悪かった。

ああ、早く全員酔いつぶれちゃってくれないかななんて考えてしま  
う。

オレンジジュースを1口飲むと、体中にオレンジが染み込んでいく  
気がした。

数時間後には、私のお望み通り全員が酔いつぶれていた。

近藤君以外、だけど。

「やれやれ、みんな酒弱いくせによく飲むな。って、未成年だった。

「よく部活停止とかになりませんよね・・・」

そう言いながら毛布をかけると先輩がもぞりと動く。

「もう11時か。マネージャー、送ってくよ。目覚まし代わりにタイマーセットしてやるわ。」

近藤君は仲のいい先輩の携帯をそつと取ると操作してまた戻した。

私は慌ててコートを着て立ち上がった。

と、同時に視界がゆがんだ。

「あ……」

思わず座り込むと、近藤君が心配そうな顔で覗き込んでくる。

「どうした？気分悪いのか？」

「あ……ちょっと匂いに酔っちゃったみたいで……」

やばい。歩けそうにない……

そしてその10分くらい後。

私は近藤君の背中の上に乗った。

私気分悪い、というとき近藤君がおんぶすると言いだした。

「大丈夫か？もっとゆっくり歩かか？」

「……はい」

もっとゆっくり歩いてください。

そうしたら、もっと長くこっつしてられる。

広くて強そうな近藤君の背中がすぐ目の前にあって。

ドキドキと騒ぐ心臓の音や振動に気づかれそうです。

幸せすぎて、泣いてしまいそうです。

「……近藤君」

「んー？」

「……なんでもない、呼んでみただけ……」

そう言つと、近藤君の背中が少し震えた。

ああ、近藤君が笑ってる。

「……なあ」

「はい？」

「寝そう？なんか声が……」

「……寝そうです。」

嘘。こんな状況で寝れない。

ドキドキしすぎて寝れませんよ。

「……じゃあ今から言うこと明日には忘れてるかな。」

「忘れてます。」

近藤君は小さく笑うと、小さくジャンプした。

身体が揺れて、思わず近藤君の首にしがみつく。

「好きだよ。」

「……え？」

「俺、小川さんのことが好きみたい。」

子供みたいな言い方をされ、笑うのを堪える。

いや、実際笑ってる場合じゃない。

「初めは可愛いな、妹みたい。ってくらいにしか思ってたんだ。でも……小川さんがマネージャーになった頃あたりかな。なんか、好きだなって。」

ぎゅ、と強くしがみつく。

近藤君の耳が赤い。

「……起きてる？」

「・・・起きてます」

「明日には忘れる？」

「・・・忘れないかも」

近藤君の腕から力が抜けて、地面に下ろされる。

近藤君の肩に手を置いたまま動かずにいると、近藤君がこっちを向いた。

顔が赤い。暗くてもわかってしまうほど。

「・・・小川さん、は？俺のこと好き？」

じっと近藤君を見上げる。

近藤君も私を見つめる。

真っ暗で、近藤君の真っ赤になった顔だけが見える。

「・・・好き」

ぼろりと涙がこぼれた。

近藤君が困ったような、照れたような微妙な顔をする。

「な、なんで泣くの」

「わかなな・・・うつ・・・」

ごしごしと目をこすると、近藤君が私の腕をつかんでひっぱる。

「目赤くなるから・・・」

腕が離れて、近藤君の顔が見える。

近い、と思った瞬間に、近藤君の目が閉じた。

唇に熱を感じた。

驚いて、目を開けたまましていると近藤君の赤い顔が離れていく。

「近藤君・・・？」

近藤君はつかんでいた腕を自分のほうへひっぱって、私を抱き寄せた。

強く抱きしめられて、頭がクラクラする。

「・・・好きだよ」

耳元で言われて、体温が上昇していくのを感じた。

夜の闇が深く、桜なんてちっとも見えない寒い12月のことでした。

(後書き)

なんか、本は何処？図書館は・・・何処？いや、きっと次は出ます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5264d/>

---

本の虫 ~ 12月の図書館 ~

2010年12月5日14時58分発行